

東京精神分析研究会にも参加。

前歴がアカとされていくつかの口がだめになったが、順天堂医学専門学校（精神医学）の大学教授にさいし、一九五〇年四月からその教授（精神医学）。

教室といつても「なにもない」から、街娼やイタコの調査をおこなった。社会精神医学の総説もいくつかかき、戦後における社会精神医学のさがげの一人となった。「やつぱりわかいころからの社会的関心が影響したのだろうね」と先生はいわれた。一九五五年の日本精神分析学会発足時にはその運営にもおおきく関与した。しかし先生は、フロイトのいう心理機制を信じこみはず、またフロイト学派でもフロイト左派につよい関心をもっていた。

一九六〇年の病院ストライキには順天堂大学教職員組合も積極的に参加し、それをまえに先生は順天堂大学理事（労務担当）となり、つづいて医学部長、学長、さらには順天堂理事長もつとめられた。その間医学教育全般、私立医科大学の運営などに関するおおくの職につかれた。

晩年には日中医学協会の仕事をいれられ、なくなられるまで四年間この会長をされた。一九九六年三月一日死去、九〇歳。

先生は精神分析、脳波研究、社会精神医学の三分野において先達であった。だが、そのいづれにものめりこむことはなかった。その時その時の状況に応じて、もつとも適切な主題をえらんでそれにとりくまれたのだろう（「流れ流され」の意

味）。だが社会的関心は生涯を通じて一貫していたようである。

懸田克躬という人の生涯を通じて、日本の精神医学の重要で興味ふかい断面がうかがあがってくる。それも成田、齋藤といった非正統の人たちとの接触もふくむものである。先生の生涯は、機会があれば一本の伝記としてかきたいだけの魅力をもつものであった。

（一九九七年一月例会）

\*\*\*\*\* 紹介 \*\*\*\*\*

アーノ・カレン著、長野敬・赤松真紀訳

『病原微生物の氾濫』

まずはじめにお断りしなければならないのは、本書が全編にわたって医学の歴史に関連した事項を取り上げているのではないということである。とくに第一〇章以降は、現今世界の医学界で問題になっているおおくの疾患を、現代医学の視点からとりあげている。その点からみれば、医学の領域の業績として紹介すべき著書ではないといえるかもしれない。しかしそれを承知であえて本書をとりあげたのは、それなりの価値をもつものと判断したからにほかならない。そのような批判にもこたえる心づもりで筆をすすめていきたい。

訳者あとがきにある「ニューヨーク在住。普通にいう意味での社会医学とはまた別の角度から、医学と社会の関係について活発な研究と執筆と教育の活動が続けている」という以上に、著者アーノ・カレンがどのような経歴の持ち主であるか知るところがない。だが巻末の二八頁にもおよぶ参考文献からみて、歴史学についてもかなりの学識を有する人物であるうとの推測は可能であろう。

本書のような書物においては、一次資料を渉猟するのはかなりの困難がともなうことから、いきおい二次資料にたよらざるをえないが、問題はどのような二次資料をとりあげるかであろう。この観点から参考文献欄に目をおしてみると、雑誌については『サイエンス』『アメリカン・サイエンティスト』『ニューヨーク・タイムズ』のほかには、数誌があげられているにすぎない。これ以外の著書はほとんどが二次資料ともいべき性質の単行本であるが、これらはいずれも質のいいしつかりした書物ばかりである。いくつかの例をあげると、歴史的流行病を具体的にしめした、もつとも権威ある著作といわれているケネス・キプル編纂の『ケンブリッジ世界疾病史』（一九九三）や、疫病の伝播していく様相を克明にするしつたウィリアム・マクニールの『疾病と世界史』（一九七六）、思慮深い考察をくわえて、手堅くまとめたマールコ・グルメクの『古代ギリシア世界の疾病』（一九八三）などである。

梅毒の起源については、医学史学においてもつとも興味深い論争の一つになっていることはよく知られている。著者カー

レンは「梅毒がアメリカ大陸からやってきたという説を否定する歴史家は多い」といいながら、一方では旧世界から梅毒患者の骨が発掘されていないのでその証拠がないという。そこでカレンは、トレポネーマによっておきる梅毒、ピンタ、フランペシア、ベジェルという四種類の感染症が、歴史の変遷によってそれぞれ異なった反応をしめた結果、あたかも異なる疾病であるが如くに表現されている、とのべている。

このような考察をささえる事実をあげて論拠を補強しているので、なかなか興味をそそられる論理の運びであるが、はたしてこれで梅毒の歴史が解決するかというと、著者も「梅毒に関する議論は、収束するどころか、拡大している。そして未だに決着がつかっていない」と留保している。

梅毒の起源をめぐる論争については、参考文献の一つにもあげられているグルメクのさきの著書に要領よくまとめられており、かつて野間科学医学研究資料館の学術講演会で、フライブルク大学のカルル・ハイנטツ・レーフェンの感銘深い講演をきいたことがある（この講演要旨は『科学医学資料研究』第二四四号に収録されている）。いずれもそれなりの学術的根拠をもった論考であることに間違いはないが、快刀乱麻を断つような推論というわけにはいかない。そのような問題をあえてとりあげて、できるだけ平易に語ろうとするカレンの努力は、耳をかたむけるに値するものといえるべきであろう。

邦訳の表題からは、医学史学に関連をもった著書ととらえることは困難であるかもしれない。しかし原題は *Man and*

*Microbes : Disease and Plagues in History and Modern Times* である。この原題、とくに副題から、われわれは著者が疾病や流行病を過去と現在の二つの時点からながめようとの意欲をよみとることができる。歴史学が過去にのみ目をそそいでいればいいのだと言う意識は、今日では通用しないであろう。過去の事象を現在にひきよせて考察をくわえる、という本来の歴史学の有るべき姿を本書に見出すことができる。

そのような意味においても、本書はわれわれが常に親しんでいる医史学の成書とは一味ちがった書物として存在価値があるとおもわれる。

このところ細菌やウイルスの「反乱」や「逆襲」ばかりである。魔法の弾丸としての抗生物質や抗菌物質の開発によって、人類が長らくなやまされてきた細菌やウイルスを殺し、封じ込めることに成功した。これで伝染病や流行病の征服が可能になったと一息ついたのも束の間、したたかなかれらは一挙に攻勢にてんじて、思ってもみなかった新旧とりまぜての逆襲や奇襲がみられるようになった。新顔としてのエイズウイルスやハンタウイルス、古顔ではあるが病原大腸菌属の新しい種類にかぞえられるO<sub>157</sub>などである。とくに昨年の夏は、これが全国的に跳梁跋扈しておおきな社会問題となり、消費生活に大きな影響を及ぼして日本の経済を左右する存在にさえ上がった。

新たなウイルスの出現と活動も旧来の種がたどった歴史的

経過をたどるのではないか、との観測もけつして荒唐無稽とはいえない。出現ウイルスがいかなる途をたどるかを予測するためにも在来種がたどった経過に目をむけるのが、いかに大切なことであるかを本書は教えてくれる。

原著を参照しないでこのようなことを指摘するのは不遜の誹りをまぬがれないかもしれないが、医学的にみて適切ではないと思われる箇所がいくつかある。目についたところでは「壊疽」(三九頁)は「ガス壊疽菌」の、「キモノジラミ」(二八三頁)は「コロモジラミ」の、「イタリアの病氣」や「フランスの病氣」(二〇〇頁)は「イタリア病」、「フランス病」の、「死亡率」(二七七頁)は「致命率」の訳語が適切であろう。二一〇頁の天然痘の予防接種についてのくだりでは、人痘接種と牛痘接種を正確に理解していないためか、訳語それ自体ばかりでなく、記述そのものにも混乱がみられる。とはいえなかなか読みごたえのある書物であることはまちがいない。読んでけつして損のない書物である。

(深瀬 泰且)

〔青土社・東京都千代田区神田神保町一—二九、電話〇三—三二九—一九八三—、一九九六年九月二〇日発行、四六判、四〇〇頁、二、二〇〇円〕